２００１

親子で読む地震絵本

Picture Book to Learn about Earthquakes

ＡＤ０１　相澤　周
指導教員　西野　隆司

1. 研究目的

2011年3月11日、東北地方で歴史的な大地震が起こった。復興には2〜30年、それ以上ともいわれる。この震災では幼い子供含む多くの命が奪われた。地震に関する事前の知識が十分であれば、被害を最小限に留める事ができたであろう。そこで本研究では、地震で起こりうる被害・予防・復興策を紹介する子供向け教材の提案を行う事とした。

2. 調査と分析

まず児童書の中から、代表格である絵本について調査を行った。絵本の対象年齢は厳密には定義されていないが、一般的に0歳から10歳くらいまでの児童を対象としている。その中でも就学前の幼児は親による読み聞かせを受けている場合が多い。読み聞かせをする時間帯は就寝前が大半であることが調査の結果わかった。児童向けの絵本は、読み聞かせを通じて親も読者に含まれると考えられる。また多くの絵本は抽象的な表現が用いられ、それが王道になっているようだ。児童向けの絵本は、たとえば戦争のような悲惨な出来事でも内容が面取りされ、直接的な表現は避けられている。地震に対する対策絵本はマニュアル色が強く、台詞や説明が難しい傾向があった。

3. コンセプトの立案

被災地は今も津波で流された瓦礫で溢れ以前の姿はない。ある日突然全て奪われ、60年前の焼け跡からのような状況からの再出発を余儀なくされている。しかし被災者達は今日も故郷を復活させるためにお互いを励まし合いながら働いている。どんなに絶望的状態でも前に進まなければ事態は好転しないのだ。彼らの力強い姿勢をコンセプトに導入することで絵本に良いメッセージが生まれると考えコンセプトは「前進」とした。

4. デザイン展開

まず、プロトタイプとしてマニュアル色の強い絵本を制作した。この本は既存のものとの類似性を避け、「前進」というメッセージを伝えることを主眼としストーリーの組み立てた。そのため本作品は東日本大震災を題材にしたが東北地方の位置情報、原子力発電所とは...という説明が必要になってくる。難しすぎて子供にはわかりにくい。また舞台設定、キャラクター、シナリオには親しみやすさも必要だ。モチーフを探したところ、候補としてキノコが挙がった。食べ物として子供からの人気は低いキノコだが、裏を返せば知名度はそれなりに高く食べものということもあり親しみやすい形だ。またキノコの食用、毒性は安全性、危険性に言い換えることができる。この二つの要素が現在問題視されている原子力発電所の安全性、危険性に共通し置換できると考え、原子力発電所はキノコの形をしていても問題ないと判断した。キノコが登場人物に害悪をもたらし絶望的状況をつくることができれば、そこから立ち上がる人々の力強い姿が描きやすくなる上、本作品の強いメッセージである「前進」を伝えることができると判断した。以上の理由からキノコをモチーフに絵本を制作する。

5. 完成図

6. 結論

検証を行った結果、多くの人から賞賛の言葉を頂き、絵本の内容については親、子供から共に好評を得た。親しみやすいようモチーフにキノコを用いた点については成功したといえよう。また当初の目的であった地震の予防と対策についてマニュアル色を避けるため対処法など具体的な描写を避けたこともあり、対処法が身に付いたなどの意見はなく、期待した効果は望めなかったが子供らの感想に頑張ろうと思ったなど前向きな感想をいただけたのでメインメッセージである「前進」が伝わったようである。

7. 参考文献

・池上彰,『先送りできない日本』, 角川書店, 2011
・ワタリウム美術館(編),『南方熊楠　菌類図譜』, 新潮社, 2007